

『思い思いの若者たち』

昔の夜間中学は面白かった（後編）

法人理事 布袋 太三

前号でも紹介したかもしれないが、生徒たちは時に不機嫌丸出しの突っ張り風体で登校することもあったが、そんな時はこの塚原が別室で、しばらく差して話し込んでいた。およそ半時間もしないで出てきた生徒は、大抵はまるで憑きものが落ちたように屈託のない少年の顔に戻っていた。別室から生徒の背をそっと押し出す塚原はマジシャンでもあった。

それから私が代理で授業を何度か引き受けたときに、いつも教卓のすぐ前の席でカーディガンを羽織り、両袖をブランとさせている女生徒がいた。私は塚原に、彼女はどんな生徒なのかと聞いた。塚原は「ウム」とうなずき、少し居ずまいを正しながら「君には話しておこうとは思っていたが…」と余りに悲惨なこの女生徒の物語を淡々と語った。彼女は電車で飛び込んだ母子心中の生き残りだった。ただ彼女はそのことで両腕を切断した。いろいろあって昼間の学校に行けず、この夜間中学へ来たというのだ。塚原はほぼすべての生徒の家庭事情や生育歴をほとん

ど諳んじるぐらいによく知っていた。

僅か数週間だったが、荒川九中での日々は実に濃密だった。私は塚原や生徒たちと授業の合間や放課後に、毎日のようによく話し合った。そして本当にいろいろなことを彼らから教わった。あれから六十年経った。あの健気だった生徒たちは今も健在だろうか。どうか幸運な人生を生きていてほしいと、今さらに私は思っている。彼らはあの思春期真っ只中の頃にふつうの人の一生分の苦勞を背負わされていたのだから、残りの人生は絶対に幸せであるべきなのだ。

ところで、現代の貧困は本当に見えにくいのか。しかしそれでは貧困は放置されてしまいかねないし、社会の不安や分断もますます拡大し、やがては救い難い酷薄な社会へと向かっていってしまう。私たちはそんな社会にさせないために、今こそ知恵を集めたいものだ。

田辺市ひきこもり支援啓発パネルディスカッション

9月21日（土）にビッグユーにて、田辺市ひきこもり支援啓発パネルディスカッションが開催されました。

今回のテーマは、「居場所との出会い～経験者のホンネ～」で、実際に居場所を利用している、利用して卒業した経験者がパネリストに自身の経験や居場所での体験などについて語っていただきました。

3名のパネリストがご自身のひきこもったきっかけやその当時の心情から始まり、居場所との出会いや家族の支えあるいは家族だからこそその苦しさなどもNGワードなしで自分の想いをそのままお話ししてくれました。

それぞれの年齢や過ごされた環境は違っていました。共通するのは「このままではダメだ」「何とかしないといけないと分かっているけどどうすればいいのか分からない」という焦りや不安でした。

最初こそ、ひきこもることでストレスから逃れられて楽になったけど、途中からはひきこもることが一番の苦しさになっていたこと。それが周りの人間に理解されない事でどんどん追い詰められていることに繋がったと過去を振り返っておられました。個人的に経験者のお1人がお話ししてくれた、居場所に繋がりが出した時に、「これまで人生を2回も失敗してしまいました。」と不安なお気持ちを相談した時に、支援者の先生が「これから3回目の失敗をすればいい」と言葉をかけ、それに救われたというエピソードが支援者である私の心に重く響いています。

支援者として、共に学び、成長していくことの大切さについては日々意識しているつもりではありますが、共に「素晴らしい失敗」をしていくことも大事なことなのだと思付かされました。

我々の支援に答えや正解はありません。

それは、答えがあるわけではなく、その人それぞれに答えがあるからだと思います。

一人一人に寄り添い、それぞれの答えに本人がたどり着けるようにこれからもお手伝いしていきたいと思えます。

